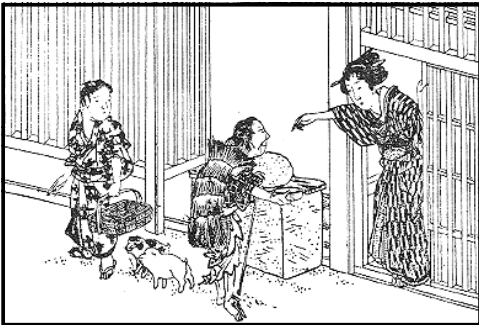


■図16 陰徳教訓図

江戸後期刊『前訓絵抄』



天保6年刊『女四書芸文図会』



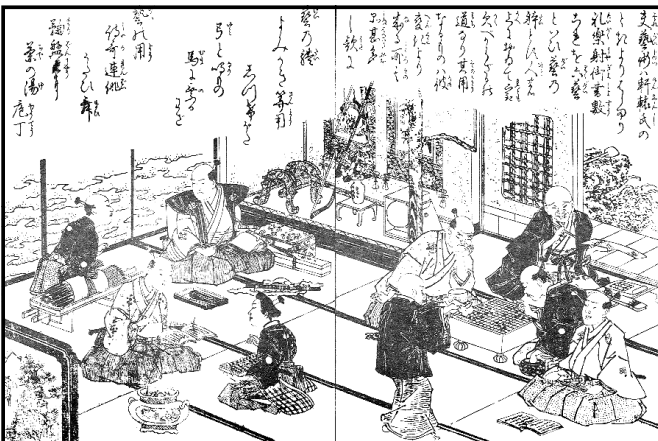
文化9年刊『実語教絵抄』



天保14年刊『女今川操鑑』



■図17 天保9年刊『幼学以吕波歌教鑑』



■図18 文久3年刊『百性往来注釈』



■図19 貞享4年刊『女用訓蒙図彙』の判じ絵 (斧琴菊)



■図20 享保13年刊『女用今川』(花鳥「寿」絵文字)



まとめ

●図像資料の可能性やメリット →一言で言えば、「新たな視点や比較材料の提供」

(1) 文字資料を補完する情報

- ・文字よりも図像の方が比較検討に便利な場合や、言葉の制約や影響を受けない比較研究の可能性

(例) 中村 斎の『訓蒙図彙』(寛文6年=1666)と、コメニウスの『世界図会』(1658)の比較 → 両書は「知識体系」「事物の描き方」「説明の仕方」等で異なるが、文字よりも絵図の比較が重要不可欠。

『世界図会』——世界最初の子供絵本。絵入り教科書。各国で250種以上の類書(日本語版1739年)。

世界の中での事物。天文学・医学・地学的な内容。凡知学(全ての事物を客観的かつ簡潔に表現)。

『訓蒙図彙』——日本最初の絵入り百科事典。明代『三才図会』や『節用集』『下学集』その他の和書(辞書類)を典拠とする。

- ・絵図資料では、「絵図をどう読むか」というアイコンロジーiconology (図像学)的な分析が大切である。図像資料の分析が進めば、歴史的資料の位置づけや認識を変えたり、解釈の見直しを余儀なくされるようなケースも出てくるのではないか。

(2) 文字資料にはない情報

- ・絵図の内容や描き方で年代推定が容易になる。
- ・刊本と写本、または刊本と浮世絵における絵図相互の影響など、文字情報とは異なる情報が得られる場合がある。
- ・説明のない絵図、本文には出てこないが象徴的に使われる絵図など、翻刻等で全ての絵図が示されていない場合には、資料の位置づけを誤りかねない危険がある。

●文字も絵図も含む資料全体の把握を

- ・資料全体を把握しないと、本当に理解できない。

→ 例えば『日本教科書大系・往来編』のように、頭書や口絵などの絵図や記事が割愛されるケースもあり、頭書等の付録記事にも重要な情報が潜んでいる場合がある。

→ 『女大学』についての研究は多いが、付録記事を含む『女大学宝箱』全体についての研究は必ずしも多くない。女性風俗図としては菱川師宣の元禄8年刊『和国百女ひやくじょ』があるが、往来物では庶民女性の職業を『女大学宝箱』ほど具体的に、早く示したものはない(「女農業之図」「女職人之図」「女商人あきんど之図」その他の女性の職業を紹介)。

→ 土農工商を紹介した『諸職往来』も享保5年初刊(享和3年増補版の序文に「元禄年間」の説も見えるが、『商売往来』との混同の可能性もあり未詳)であり、男性用の往来よりも『女大学』の方が早い(単なる職業の名称なら『庭訓往来』『化城咲草』などの古往来にも出てくる)。

●図像資料の活用をめぐる二つの課題

(1) 版本・浮世絵等の膨大な絵図の分類とデータベース化

- ・浮世絵中心主義から、版本・写本を含む豊富な絵図からの検討

→ しかも、特定の浮世絵師の、特定の時代の、特定の作品のみが取り上げられ、研究されてきた弊害。

→ 浮世絵歴史350年のうち、約30年程の絶頂期の作品で、浮世絵全集の6~7割を占めるという事実。

→ 版本の図像にももっと注目すべき(資料として扱う場合に、図像に「芸術的」な優劣を付けるべきでない)。

- ・絵図のデータベース化の標準的な方法論の確立が必要

(2) 絵図に含まれる「事実(リアル)」と「架空(バーチャル)」

- ・絵図の意味や背景を研究する「アイコンロジー」的な発想や手法

- ・近世人の「言葉や絵図の遊び」は、現代人よりもはるかに豊富で、面白い。

→ 浮世絵は「芸術」でなく「生活必需品」という指摘(高橋克彦『江戸のニューメディア』)が近年なされたが、庶民の日用品・生活情報・娯楽という視点で、絵図を読解していくことも大切。

- ・描かれたものが全て現実とは限らない(リアルとバーチャルの区別が重要)。